

富士に登る

文 佐伯 市野 瀬 仁
俳句 坂ノ市 末 ^光 _海 鳥 ^拳

はじめに

今年四月、今度七き立川先生が、佐伯史談会員数名を高崎山に案内して下さった。その時「大分探勝アルコウ会の百回突破記念に、七月の下旬富士登山を試みていゝのですが、登りませんか」との誘いがあった。夏休中なので、沖優行きが駄目になつたら、富士登山に参加しようと思つていた。休みになつて立川先生に電話でその旨を連絡したところ、心よく引き受けて下さった。その直後立川先生急逝の報を聞いて、驚き入つてしまつた。心からご冥福と祈るのみであつた。

百回アルコウ会を企画し、それを貫徹した実践の人、御土史家の今度七き立川先生は、最後の遺土産のように富士登山の計画を立案して下さつたように思えた。

やがて大分探勝アルコウ会から、日程と諸注意の記載されたハガキを受け取つた。登山には全く経験のない私達夫妻は、二三の登山家に注意を聞いたリ、本で調べたりして荷物や心の準備をすすめた。

出発

七月三十一日午後二時集合予定の、大分文化会館前に予定の十五分前に着いた。一行の中に坂ノ市出身末光拳氏(俳人)、漆矢勘政氏(

佐伯史談会員の二人が居ることが分つた。私達はみぎ三号車のお世話になることになつた。

もらつた冊子を見ると、登山リーダーに杉野重良敬諭(佐伯中学校)、首藤真司敬諭(領田中学校)。救護班に安部好緑氏、長岡俊彦氏、千原直葉氏(以上県立病院)。その他一、二、三号車とそれそれ世話役が四人、或は五人指名されていた。末光拳氏と私もその一人であつた。以上の役員は前に出て紹介された。

三水大分市助役が、この催しに対する喜びと激励の言葉があり、つづいてアルコウ会々々長代理の平野氏が、富士登山礼讃の妙味ある挨拶をなさり、三台のバスに乗つて、十六時出陣のため大分港へ向かつた。

ダイヤモンドフェリーの甲板から大分臨海工業地帯を遠望すると、霞に包まれて判然としなかつたが、その規模の大きさはうかがえた。

天気が上々、東風約十五米だが、波舞かにして動揺を感じず。人々以上甲板で涼を楽しむ。一行の中に地理学者大分大学の兼子先生をお見かけしたので、松山港寄港中の夜半、蛍光燈の青白い波止場を見下しながら、しばらくお話を交わす。また佐伯東小中学校の先生方一行も、山陰旅行の途中とかで同乗しておるらしく、知り合ひの先生一人と出会つた。旅に出て知人に会ふことはまた楽しいひととである。

高速道路

八月一日

飯塚を極める神戸港土、フェリー登着場の朝は静かであつた。六甲の山々も今坂りから霞りた頃であつた。

バスの中で折詰の朝食をとつたがうまくない。私はこ

この種の傘当りほとんど苦手である。幸い昨夜船が松山に碇泊中、船内に売りに来られたを買って持つていさうで、それと二個食べてやつと気分が引締つた。

神戸と出発すると、バスガイドの誤解がつづく。岩神高速道路、東名高速道路進行中の説明は仲々事を得て、道切れも良かつた。窓から眺められる両側の名所や、道路の由來を聞いて、旅を乗り主人達の声が反応を示した。山々を縫つて敷かれた道路を、時運八十キロから百キロのスピードで走る動搖は心地よい。

雑木林がはつづく。竹林がはつづく。したたるような緑に赤松が鮮かに浮き出て目を惹いてくれる。大津、浜名湖、富士川のサーピスエリアでは、十五分の休憩をとった。三ヶ所ともすべて山と水の美しさをたっぷり味わせてくれる所だ。

車中の折詰傘当りに少くへきえきしたか、せいたくは云えない。三泊四日の全日程が一万一千円だから辛抱しよう。富士川サーピスエリアを出発すると、富士がま近に仰かれ、一段と緊張する。

スバルラインをゆく

バスはだんだん山手に入る。世界ジャンボリー大会場朝霧高原は、渺々たる草原で、赤や黄の天幕が旗が立ち並び、湖を待っているようである。「創価学会の大本山はあゝ森の向こうです。建物が見えませんが」とガイドは云う。

朝霧高原、世界ジャンボリー大会
若者の天幕、夏野を埋めつくす 鳥 人

富士山は、噴火によつて五つの湖をつくつた。富士山

はその美しさをいやが上にも美しくするために、五つの鏡を用意しているという話も聞いたが、うまいことと言つたものだ。事実奇麗な姿が、湖水に影をおとすのだ。うだうだとくは河口湖へ迷ひ富士は有石である。

本栖湖、精進湖、西湖、河口湖、それぞれ個性のある湖を横に見ながら、砂けむりを上げる山道も通つたり、舗装道路をバスは登つて行つた。富士山どこから見ても美しい。三台のバスは夕ツツアリ給油し、エンジンを冷やして後、速度を落とし、五合園レストハウスに立つて行く。冷房のきいた車庫で日暑さを知らない。四面緑の樹林でや、暗くなつた感じだ。

赤松が林立する、白樺の木々が目に走る。とがの木が見えて、濕気を持つた靈気があたりにたたまつていよう。途中マイクラーが下つて来るので、運転手は一瞥も目を離さない。

すばらしい舗装道路だ。全副換票でかち得た名に恥ぢず、スバルラインをバスは仙境に入り込む。だがそれは長い時間ではなかつた。意外な世界が展開して来た。

無残にも枯木が悄然と立ちすくんでいるのは、一件どうしたとどきのなか——残照に引き裂かれた白い死骸が延々と続く。車中の人間どもを亡霊があや笑つていさううに見える。そんな世界であつた。

原始の昔から、富士の裾模様の莊重で、或る時は艶やかな四季の衣更えとくりかえして来た。それをこのようにな狂気に満ちた行爲の代償が、観光とはおまじにも人間は知恵がなすすぎはしなかつた。生態学者に云わせると、これ等の完全復活は百年かかるという。外見は現事な名前前にふさわしい富士ハスバルラインこそ、実は我が國で自然破壊の一番標本になつていさう所なのだ。

バスの窓から手の届ききりな所を、真赤下駄打大塚岩

の肌が厚く斜行してゐるかと思つと、黒々と焦げた岩層が無意味に迫つて来る。

ハツと明るくなつたと思つと、眼下に見事な雲海が広がつてゐる。「雲か山が吳か越か」ではないが、下界に見えない光景である。雲の間から山中湖がのぞき、湖畔の街々も見える。田園・草原が雲の間に展開する。誰かが「飛行機に乗つてゐるようだ」と。

スバルラインを登る

鳥 人

富士玲瓏 大澤くづれ雪残る

雲海の采バアルプス展け来し

アルプスの峻と富士山雲海に

夕陽まさに暮れなるとする頃、五合目レストハウスに到着した。馬と人と建物と出店が一度目に入った。

バスを降りると、旅の疲れが頭が重く、足許がフワフワする。高山病の恐怖心は去つたようだ。

夕食、諸注意、買物をすませると、街のような雑踏を後にして、六合目の雲海荘に登る。火山灰の山道をザックザックと踏む気持ち、初陣のようである。山岳リーダーが「明日の登山の足だめしだと思つて登つて下まい」と言つた。

雲海荘に泊る

三等車の扉に割り当てられた部屋に、腰をまげて入つて行く。六合目雲海荘の部屋である。地下と一階に分かれた掘立小屋のような設計で、地下の天井は低く、立つては歩かれない。雪がたれ、山崩れの為でそなえての設計をそうだ。早寝をかねて、明日の準備をする。リーダーが入つて来て、一人一人異つた体質や気持を持つ高令

背をA班へ頂上まで登る組」とB班へ登山しないグループに分けることにはとと苦勞する。

「おはあちやんはどうかするンヤ。七合目まで上つて、おるけりや引返してまいいと云うちよるんよ。」

「かん高い声で話すが、いつこうおはあちやんは話さない。」

「おしやとはかく七合目まで上つて見てからのことにするワ」

「おはあちやんは足には自信があるンよ。由布までこいで登つちよるもんやから……。左を耳かきしてナヤ」

「おはあちやんは七十六才の方らしい。」

私口、いびきや話声が眠れないうで外に出た。眼下に点滅する街の灯が夕暗を通して見える。大きなゼツケンと一人一人胸と背につけて登つて来たのは、京都の団体であつた。頂上でご来光を拝むために登つて来る若者の声で絶え間がない。

眠らぬ夜、只一人、日本の中央に位置する名山富士の六合目に、吾今立てりと、自己を存在を確認する。

六合目に泊る

鳥 人

明け易し 全剛杖を杖也に

登山靴 紐締め直す星明り

八月二日。

二時間睡眠でも普通と全く変わらない。登山に討つる少の不安と、自分を鼓舞する意志と感情を合わせた緊張感と眠さう。

早朝の冷気は心地よい。七合目まで日トレニングの様な軽い気持で列について行く。「ザク、ザク」と火山灰の砂礫にめりこむ。登山靴を引いて来てよか

たと自分の足許を見る。

いろいろと誤り合ひながら登る足どりは怪しく、等しい
早朝に、鈴の音が響しけに振る。馬に乗つた女性を引
つ張って行く馬方が、大きな声を出して通り抜ける。聞
は少し白けた。何回自分の休憩の音がかかった。
東方の地平線に、朝の太陽がにぶい光を出して来た。
雲紫に染まつた四界に、登つた太陽の位置は、登るの大
なびく地平線の中心点であつた。

七合目をめざす

鳥 人

雲海や 攀ぢる 熔岩 脚重く
富士登山 一步一步に 吹き出る汗
出るだけの汗拭く 富士を登りつ
昂まる 動悸 鎮む 御来迎と待つ
御来迎科め 鎮む 散棒つ鞠
御来迎のもと 日の丸 竿 当開く
汗垂るる しモン 見栄なくし やぶりつく
七合目にして 老鷹を 聴かんとは
見上げれば 山頂 脚下に 雲海

七合目までは一時間ばかりかけて、そこで朝食をとつた。この間、人々は自己の体調を再確認した。自問自答の表情が見える。山岳リードは希望を失わず、無理をさせず、下山の希望者とまつた。希望者にはさすがに萬令者が多かつた。これ等の人々日五合目待っているB班と合流して、伊豆スカイラインに行くことになる。未光拳さんや阿部さんは遂に下山することになった。で、一時のお別れを惜しんで記念の写真をとつた。昨夜話題にのびた耳の遠いおばあちゃんも、おきらめて下山したとを後で聞いた。

登攀を断念

鳥 人

引返すも悔なし既に雲海上の音
先陣と言ふ勿れ者今雲海に
雲海に乗り富士の驛鳥を 聴き下山

下山風景

鳥 人

全剛杖棒として下る砂すべり
登る人を優先富士のエネケツト
馬励ます汚女尻に鞭すりのけ
耳を澄まして富士の驛鳥を 聴く 樹海
敗軍の将山を 踏らざれモン 吸ふ
高山痛快癒冷房バズリ在り

今朝立つた雲海荘から富士の頂上を仰いだ時、すく頭の上にあるので、六時間かかるというのか嘘のように思えた。

しかし七合目を登って行くと、道の峻しくなってくるのがはつきりとわかり、杖についている鈴の音も耳に入らない。

「足元を見つめて、体重と前にかげよ。上を伺いてはいけない。」

富士登山専門の案内人の声である。八合目はまだらうかと上を向くと、目がちらちらする。どうかするとフラフラとしてしまう。あたり一面火山灰、砂礫の山である。道端にバツタリ麻こるぶ色の青い若草もいる。六合目からさつそうと馬に乗っていた婦人も、バツタリ横になり動きそうもない。私は出発する時、独りで自分に言いかけた。「マラソンと同じだ。始め無理をせず急がず遅れず隊伍にくっついて登頂しよう。」と、あえぎあえぎ登る隣の人の息づかいが聞こえる。しやべる者はいいない。

しかし元気が者もないものだ。ある父親は寝た息子供を背負っていて私を追い抜いて登った。自転車をかっいで登って行く若者もいる。新宿から来た学生と云う。だかみんな汗をかいていない様だ。山が乾燥しているからだろう。それに酸素不足で頭痛がすると訴える人は全く聞かない。

八 合目

八合目について。七、八、九合目と登る途中には休憩小屋も売店もある。そこにはレモンもある。何はともあれ、腰をおろし、リュックを肩ずして体を楽にする。天気全く晴天だけれど、風速六、七米、風や冷たし、ヤツケを身につける。

ぐつと高い位置に居ることが分る。山中湖の上空に浮かぶ白雲が実にきれいだ。駿河湾、伊豆半島も霞の彼方に見られる。山脈とはよくつけられたものだ。飛騨の山々が雲海にぬきこんじて、波を二条画いている。ジャンボリー会場の朝霧高原、富士演習場の位置を案内人が指さした。山麓のすばらしい樹海は、昔も今も多くの人々を魅めてくれたものだろう。何人としてもこれを壊してはいけな

い。
下方から登って来る人、人列。いろとりどりのヤツケで、小粒のように見えるのは、帯り道か「砂走り」を下へている人の群だ。こうして見ると人間は何と小さなもの、ホントは大自然の千里のようなものではないか。

青い植物が稜線を色どっている所はもう下り方だ。手前の栗芽を角度で流れている稜線は赤い表層だ。赤茶けた油絵で富士を描いているのを見るか、事実富士の肌は赤茶けた色で覆われている。反対側の稜線は赤黒い層だ。

八合目で下山者が出た。山岳リーダーは最後の念を押して、何人かがある人に托して下げた、もう登る人も

下る人も思い或すことはない。リーダーは賢い処置とどるものだと思つた。

休憩をすると思はすつととれてゐる。休憩の妨りがないが身にしみる。ここは売店で買った飲物は効果てきめん。足がぐつと軽くなり、いつの間にか人を抜いていく。傾斜は一段とひびくとなり、踏みつける石は針金で落ちないようには縮んでゐる。それを踏みつけ踏みつけする中、胸の鼓動がひびくようになるのを憶える、しかし規則正しく呼吸と脈は打っている。懸岩の瓦礫の上に倒れたようにはおている人も多い。

人と人の体が接近する。人の足どりをみると、抜く人、避ける人がよくわかる。若い娘は彼氏の腕にすがって登る。汗は出ないが体が熱い。私はヤツケの為風を逆さにくらったのでばずした。登山家が、米を登るのに二時間か三時間かかることがあるのをきいたか想像がつく。子供でも登っている富士に、へこたれてどうするかと自分を元気づける。ここが自分の峠かもしれぬと思つた。夫婦子供四人連れは父親は低い声で「無理するな、ひとくなつたら休んだ。呼吸を合おせなさい」という。私はその低い声が経験者としての大切な言葉として全身に響いた。中学時代、マラソンで苦しかった時のことを思い出し、ぐつとがまんして重いリズムに乗った。

頂上

八合目を通過して「ここが最後の休憩地点だ。もうすぐですよ。」と案内人の声である。登山者が苦しんでいるのを写すのも酷だが、私は悪いおの地点としてシヤツタを脱いだ。案内人の云う通り、頂上はすぐそこであつた。

「さあここが頂上ですよ。……あ、ここが頂上か。」

何んとも云えぬ喜びが、しばらくして静かにこみ上げて来た。

浅間神社に参拜をした。金剛杖に登頂記念の焼印を押した。その上、のんびり、8.10.10.と記録した。

頂上には昔の田舎に見られた祭り風景のように、売店がずらり並んでいる。左を売子か丈夫な男達のサレビスであることが違っている。

山岳リーダーの命のまま、休憩場のある店に入った。

そこには甘酒、味噌汁が百五十円で売られていた。皆このことを知らずに居るのか、あまりはいって来ないが美味しい甘酒におかわりは多かつたようだ。

「ここは富士山の頂上だ。古いちやんたよ。良しやんか。ばあちやんいるかい。孫んぞおくれ。」富士山から大分市のお家が、電話をかけている声である。

中食が終了、赤矢勘藏さんから頂いた冷たい夕オールドをふいた。甘酒に劣らぬかよい感懐を覚えた。今の私には登山経験者の善意ある言葉と行爲が一番胸にこたえる。

アルコウ会参加者百五十名中、五十一名が富士登頂に成功した。七十才をこした三人の高令者は、神社から表彰を受けた。元氣な方々ではある。心から祝福したい。

八合目を登ってくる時、左方をブルドーザーが二台止っていたが、頂上の店のはずれに一杯荷物を積んだまま止っていた。

噴火口

一行は小高い所に集まっていた。すごい噴火口がはのくり口をあけている。楕円形の噴火口の周囲も大体一つの視野に入る。直径五百米を踏んで左向うの高い地点に、氣象観測所が見える。標高三千七百七十六米の剣が峯だ。

石原裕次郎が氣象観測所を設営する映画を見たことがあるが、これは大へんな難工事であったろう。

富士山は一七〇七年へ空永年間、五代將軍綱吉の頃の爆発を最後に、休火山となつてから二百六十年、歲月を経た。当時に噴き上げられた熔岩であるうか。黒々と焦けて、無気味に突出して火口壁をつくっている。真赤に火を噴いたその色がさめてか、赤茶けて火口壁は湯を巻いているのがわかる。深さ二百米の底をよく見ると、

一竿の小旗が真中に立つている。黄色い円形の印も見える。この底にはまだ一人しか下りていないと聞いた、どうして下りてどうして上つたのかであるうか。

直径五百米の噴火口の縁に、立ちあがりた人々がたむろれている。驚きと喜び、安堵と興奮、静思と感動の交錯する感情を、体全体に包んで、動く人、ねころぶ人、熔岩にかけて見ている人、思いにふける人、疲れをいやす人、

古い若きも、男も女も、日本一高い、日本一美しい名山に一切を忘れて委せきついている姿だ。山頂の人々の気持は快晴の夏の太陽に似て明るい。おそらく、一人一人人生の最高潮の幸福感に浸っているのではなからうかと思ふ。

赤矢勘藏さんも私も、山岳リーダー達も、彼も彼女も記念の写真を残した。

ケルン

自由時間は打ち切られ、全員集合した。これより今は七き立川先生の写真とこの山頂に埋め、一人一人が傍の石をうず高く積んで登頂の報告をし、「静かにお休みなさい」と先生がご冥福を祈った。こうした歌をケルンと呼ぶのだそうである。

立川先生は、八十年のご生涯後半は、とくに社会奉仕に

立川先生は、八十年のご生涯後半は、とくに社会奉仕に

明け暮れたものだ。お礼は、先生にお世話になつた人々の手によつて、先生の写真が、念願の富士山頂に埋められた。思えばよき人生ではなかつたらうか。幸福な方ではなかつたであらうか。眼尻の上つた、眞けん氣の口元、青年を凌ぐ紅潮した頬。亡くなられても全く嬉しさを感ぜない。

百一回、黄泉の宮で富士に立つとも返落しているのではなからうかと思ふ。

墳火活動より六十年、その後は教百回と地質学者は推定している。気が遠くなるような時間を経過と共に、山は刻々と変化を続けている。火山活動を休止してより二百六十年、後世代の人々が、遠くから、或は近くから見て、絵に描いて人生の指針とも、あるいは信仰として仰いだこの富士。

平和を愛し、喧嘩仲裁の上手な木花咲野郎が富士山頂に祀られてゐるのも、むべなるかなである。悠久な時間の中に、立川先生八十卒の御生涯もすては返らされていつた。今私達は、その瞬間に生きて故立川先生とお別れしようとしてゐる。

下山

三号車の私達はいつもグルーポの殿だ。登る時は三匹の先頭と心がけていたが、私の悪い癖で気がゆるみ深矢さんと私が全くの殿りとなつた。

下山道はブルドーザーが登つて来た道を下るので、広く傾斜の中もやがてあつた。鼻頭まじり、四方を眺めては下つて行くうち、いつしか傾斜がひどくなつた。

やがて道らしき道はなくなり、ザブツザブツと火山岩の砂礫に靴がめりこみ、大へんなスピードで駆け下

りる。いつの間にかこんなことになつたのか、自分ながら不思議な位、まるで障礙物競争のようだ。登る時とばまらで違う。鼓動と呼吸がバランスが取れぬのだ。

「踵と先につけて、体とそつて下りなさい。」後から声がかかる。自分の周囲に誰が居るのやらサツパリ分らない。見る暇もない。

残雪

突然、真白い雪が表層の下に走つてゐるのを見た。残雪である。薄い層である。人々の手で深くえぐられてゐる。人も我もつかんで、見る、食べる。しばらくの間持つ左手に冷たい感触がなくなる。雪の塊は冷たくないものかなと自問しながら我を疑う。

一体今何を目を下つてゐるのだらうか。どうも疲れがひどい。膝を下す人も通り抜けて行く人も見るが、私の知つた人はいない。それは前々人の砂けむりで、その後は追いついていけない。「砂走り」と云つて写真と見るとさぞ楽しげに下つてゐるが、どうしてどうして大へんな所である。

腰のタオルをとって口を巻くと、ゴミは防げるが呼吸が幾分苦しくなる。どんな扱われるばかり。「そうた無理をしてはいけない。人を相手にするとおせるばかりだ。しかし人を見失つてはいけません」と思つて、人の休むいしている所までがんばつて体を。先刻深矢さんが大へんなスピードで通りぬけたが、声をかけられる暇もない。

こうして休むこと教を知らず、というところまでいられるが、おれは、……。

ガス

この頃、下方から霧(ガス)が全面をはい上つて来た。

全く経験の無いことではあるし、あつちこつち腰をお
ふしでいる人も石の如く動かない。突つ立つた一人の男
が下方でトランシバーで連絡をとっている。落ち着
いた声だが、がらび比較的短い時間を通り抜けた。三四
やうて来たがすか通りぬける、しまいに足がスと待つよ
うになった。ガスが来ると思はれ、さういふからた。

世話になつてゐる他団体、女性後まいるし、ミスと
二、三回回転して私の横でやつと止つた大男もいるし、ス
ックの石ころが入つて、困り抜いて落伍する人、それ以
外は大人だ。

ガスが間から六合目の雲海荘が見え、たつた急に元氣づ
き、胸がずつと落ち着いてきた。

雲海荘にたどりついて荷物の数を数え、救えるほど
しかたがなかった。一口目を残つていた水をゴツクリとのみ
こみ、最後の力を振りしぼつて立上つた。重い荷物を金
剛杖に通して肩にかついで歩いてバスを待つてゐる五合
目まで二時三十分までに着かぬならぬ、この三十分
間、長いこと、苦しかったこと。戦時中の行軍そのま
まだつた。

バスに乗つて

このバスには五十一名の登頂成功者と、八合目で引返
した人々を乗せたので、超満員であつた。人員の再確認
をして、日班の待つてゐる富士川のサウザンエリアへ
下つた。

山岳リーダー杉崎教諭は、バスが平坦な道に下つて人
々が落ち着いた頃、全負無事を喜んで後「富士登山に測
して私達がやつて来たことに對して、何でもよいからこ
意見を出して下さい」とマイクで話しかけた。

前の方から一人意見が出た。次いで私は、全負無事の
かざりとつたりリーダーの適切な処置に、全幅の敬意をの
べた後、若干の苦言をつけ加えた。「服装のこと、食物
のこと、睡眠のことに注意のこと。下山の場合の注意の
こと等、また、もう少し富士山を研定してほしかつた」
と、この意味のことを具体的に言つた。また山岳リーダー
諸氏に對する謝礼のこともつけ加えた。又深矢さんから
「登山・下山中は、グループレの順番を交互に変更すべき
だ」との意見があつた。私は登山には全く素人の私が暴
論を述べて、後で恥がしく思つた。しかし私の意見に對
して強い拍手があつた。それは全負無事にこぎつた裏
にあるリーダー達の若慮と、賢明な処置を述べたことに
共鳴したからであると思つた。

箱根路

裾美し 乙女峠の夏の富士

鳥 人

芦の湖

鳥追が 鶯笛を吹く湖畔

鳥 人

富士川に A 班を待つ

西日賣う富士と見送り友を待つ

頂上を極めし顔の汗まみれ
汗と砂がぶりー顔に笑み湛え

歸路

五合目レストハウスで登頂者をまとめ、人員を確認す
るのり時間をつたため予定が狂い、富士川サーヴィス
エリアで日班は首を長くして待つてゐた。
三十分ほど休憩ののちにバスは東海道登山陽道を夜
つひいて走り、徳山に向うのである。

日班で待っている間は、妻が買ってくれた二本の牛乳とバナナの味は、忘れることが出来ない。また登山に氣つけのためと思つて持参したウイスキーも、自分で初めて買つて飲んだもので、これも忘れられぬほどうまかつた。

昨夜もろくに眠つていなかつた。夜は更けても仲よく眠れない。途中トイレ休憩もあつたが、十二時一時となる。車内の話声は絶えた。だが大車女運転手のハンドルを狂わせないため、他一人の運転手が横で話しかけているだけが聞こえる。三泊四日の間三人も運転手が交替して運転する。目々前でハンドルを握つてゐるのを見てゐると、やはり汽車旅行より不安を感じる。運転手さん頼みますよと念じながら目をとじた。

帰 途 鳥 人

高速度路 富士日焼して帰心

高速度車 降りうまい蕎麦食ふ真夏の夜

バス冷房 少女お別れの唄歌ふ

八月三日

原爆の街広島を通る頃は、朝の出動時間を探し過ぎた頃であつたらうか。私は始めて見る広島市であつた。木田川の三角洲にできた都市だけに、川が鉄本も流れ、立派な橋が幾重も見られた。

「六十年前は草も生えぬと云つたが、立派な都市になつたわね」

と若矢さんが後の席から言つた。朝のせいかわつた街より清潔に見えた。

岩園から徳山に至る朝の山にはさまれた集落の家屋は殆んど赤い瓦ぶきである。山陰地方と違つて雪や雨の少

ないこの地方にどうしてかある——。この瓦は風土的に条件がそろつてゐるものであろうと思つた。妻が「瓦は立派だけど、家は紫外お粗末よ」と横から云う。私の部落の家々に思い比べるそうも見えなかつた。

どこの街の附近であつたらうか、山々の谷に積線が少しも生気がなく、毛穴がすいたように、禿のとまらぬ頭髪のように、枯木があつちみちつち悄然と立ちすくんでゐる。その上無数に汚ない色の砂岩が、山肌を露出してゐるのだ。それが沿線にかなり続く、あの山も、この山も、縁に包まれた日本の山野に、こんな所もあるかと淋しくなつた。私がよく旅をして帰つては、「地球はい、所だ、そして日本はい、縁に包まれて——」と述懐すると、妻はいつも「オーバーな」と云う」と笑うが、事実そう思うのだ。

四 東、そして別府へ

徳山渡出帆が九時三十分の予定が十二時ちかくになり、国東半島の竹田津港にいた時は雨が降つていた。

二時間の船内では、井上善一氏、高木富士太郎氏のアルコウ会の幹部の方々に、その実情を聞いたり、この度のお礼を申し上げた。

また今回の登山リーダーで、中心人物の神野教諭から富士山についての話を聞き、厚くお礼をのべた。そんなことで私は四年間住んだ懐しの国東の地を眺めることはできなかつた。

竹田津港から別府のドライブインに到着までは、三日間の好天気とうつてかわつて、土砂ぶりの雨であつた。ドライブインで入浴、夕食をとつて再びバスに乗つたのは、五時をだいぶ過ぎていたと思う。

別れの歌

バスは最後の行程、別大国道を走る。誰からともなくマイクを持つ、俳句をよみ上げる人、登頂の成功を短歌托し歌う人、最高司令者の感激の弁も聞かれた。また一婦人は次の詩を吟じてみんなを感動させた。

富嶺 萩乃木希典

峻嶒富嶺登千秋

赫灼朝暉照八州

休説又々風物美

地靈人傑是神州

お一人組の若い女性達「別れの歌」の二部合唱、訪す人、聞く人又々な、三泊四日の感懐が、車中一杯に物をかいて振がった。とくに彼女達の「別れの歌」の調和音は、旅に疲れた人々の心をやわらかく包んでしばらくは離さなかつた。私はたまらざアンコールをお願いた。

午後六時過ぎ、出発の地大分文化会館前バスはとまり、全員無事降車した。そして平野会長代理のご挨拶を聞き、三々五々別れて散った。

登山リीडグーは、ホントに苦渋さん、運転手さん、車掌さんおかりかとう。みなさん、お元気で。

かえりみ

今まで、絵や写真で富士を美しく見た。歌や詩で読んだ富士に気品を感じた。東海道線の車中から眺めた富士は、雄大にして神秘を味わった。又この度の登山で、私はきびしい富士を知った。

今までこんななほい体験は、中学時代のマラソンと軍

隊での行軍以外には思い出せない。富士登山の手引書で見ると、私達の登った河口湖コースは、交通が便利まの、頂上への最短コースとで、登山者が一番多いらしい。しかし昔風に制約された団体行動のせいから、知らぬが、みんなにひどい騒動は私一人ではなかつたかもしれぬ。私は頂上についたら、太平洋面に向かつて好きな詩を吟じようと、前々から胸に秘めていたのは、全然そのことを思い出さなかつた。それを今では少々の心残りとして、とにかく三十分数年ぶりに、全身に鞭を浴びせられた感いである。家内はその苦しさ話すと、
「おななは、おもしろい」と云う。富士はその私を、大きくゆさぶった。四十九才にして、私は偉大な教師に巡り会った、と云えるのである。
(おわり)

佐伯文化会館落成
祝賀記念行事

佐伯史談会の後援主催

鶴屋城懐古展と郷土先哲遺墨展

ハ予告

三の丸に、旧御殿がわかつて、壯麗な文化会館が出来、その竣工祝賀の行事が盛り沢山の企画を、準備をすすめている。
わが佐伯史談会は、これに協賛して、次のような企画をもっている。

期日：十一月二十三日(火) 高湯感謝の日 二十四日(水) 二十五日
会場：文化会館 階 会議室

◎ 鶴屋城(豊後佐伯城)懐古展覧会

鶴屋城復元絵画・在りし日の三の丸(明治時代の三の丸写真)

◎ 御土先哲文人遺墨展覧会

三の丸御殿関係のいかなるもの、その他いろいろ、
秋室ゆき子、橋本龍溪、鳴鶴、鶴公、寺、及び求道、秋室、